

### 第3回 大熊町ゼロカーボンビジョン策定有識者会議 議事要旨

1. 日 時：令和3年1月12日（火）13時00分～

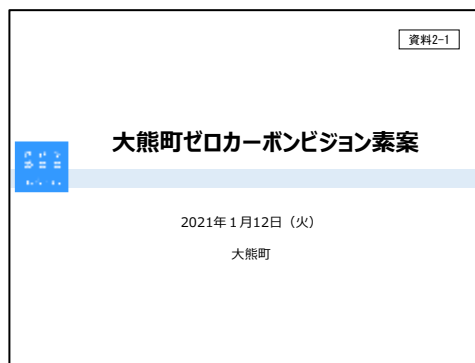
2. 会 場：大熊町住民福祉センター 会議室

3. 委員出席者

中田俊彦（座長、東北大学工学部教授）、亀山康子（国立環境研究所社会環境システム研究センター長）、大倉紀彰（C2ES）、鈴木精一（一般社団法人福島県再生可能エネルギー推進センター代表）、石井和弘（町議）、土屋繁男（行政区長会）、梅宮功（副町長）

4. 議事概要

- ・ 中田座長からの挨拶のち、事務局より、ゼロカーボンビジョン素案について説明。
- ・ 将来の不確実性をどうプラスに変えていくか、ゼロカーボンを町民に前向き捉えてもらうための情報発信などについて活発に意見交換を行った。



5. 議事の要約

（事務局からのゼロカーボンビジョン素案の説明）

- ・ 資料に沿って素案の説明。前回会議以降の国の会議において、2030年までに既存技術でできる対策を迅速に進めるべきとの方針が示されたことを踏まえ、再エネ導入を早期に進めたパターンとして2030年にゼロカーボン相当を目指すC'（先導的改）シナリオを提示した。

（質疑応答・意見交換のポイント）

①不確実性をプラスに変える

- ・ 2050年までのビジョンなのだから、将来には不確実性があることを踏まえて策定すべきである。分からない部分は技術の進歩などを前向きに期待しながら進めばよい。例えば洋上風力が導入されれば再エネ導入量は圧倒的に伸びるし、海外のグローバル企業から大熊町への進出意向が舞い込んでエネルギー消費量が増えても十分に供給可能になる。完璧な計画ではなく柔軟性のある70点の計画がいい。（中田座長）

- ・ 数年前には低炭素で 80%削減という目標を撤回すべきという議論さえあったほどだが、いまは隔世の感がある。一年一昔で世界が変わっている。今回のビジョンも2~3年後に色褪せるかも知れないという感覚で野心的な目標を立てるべきだ。(大倉委員)
- ・ 将来シナリオはC'のほうが大きな目標として望ましい。「2030年のゼロカーボン」といった目標を掲げて取り組みをリードしていく姿勢が重要である。(鈴木委員)



## ②町民への情報発信

- ・ 温暖化が放置されれば2100年に東京が2メートル海水に沈むという番組を見た。一般の人には自分にどう影響があるのか直観的に示してあげるとよい。また、再エネを使う側である町民にとっては、ゼロカーボンで生活がどう変わるのかイメージできる説明が必要である。(土屋委員)
- ・ ぜひとも帰町するかどうか迷っている町民がワクワクして心に刺さるようなビジョンにしたい。それを裏付ける充実した補助制度も不可欠。シナリオ実現に向けて懸念材料となるものがないか洗い出して対応していくべきだ。(石井委員)

## ③需給マッチング、再エネ変動性への対応

- ・ 再エネ大量導入に当たっては需給のミスマッチへの対応が不可欠だ。太陽光は晴れた昼間以外は発電できないし、電気に依存した場合のリスクも懸念される。多様な再エネの導入や蓄電のシステムが必要だろう。(亀山委員)
- ・ 大きな課題と認識。蓄電池や水素の新技术を持つ企業を積極的に呼び込んで町内で実証を進め、更なる投資を呼び込むといった好循環を期待している。(事務局)

## ④大熊ならではの、大熊らしさ

- ・ 「未然防止原則」がテーマだ。地球温暖化で深刻な影響が出る前に、後回しにせず積極的に取り組む姿勢は、原発事故で大変な苦勞をした大熊町だからこそ意味が深まる。この理念には世界から多くの共感が集まるだろう。(大倉委員)
- ・ 大熊ではカーボンマイナスによって他地域の手助けをすることを明確なメッセージとして打ち出すべきだ。域外売電をすれば地域経済の収入増加にも結びつく。(大倉委員)

(以 上)